



ミライク会議  
公式ホームページ  
#Q1200はTwitterフォローの  
登録画像です

オンライン開催決定!!

かけがえのない“わたし”を生きる  
～ものづくりのまちから発信～



# 日本女性会議 2020 あいち刈谷

Japan Women's Conference  
2020 in Aichi KARIYA

ミライク会議

2020  
11/13(金)14(土)15(日)

主催：日本女性会議2020あいち刈谷実行委員会、刈谷市  
事務局：愛知県刈谷市市民活動部市民協働課内  
〒448-8501愛知県刈谷市東陽町1-1 TEL：0566-95-0002 FAX：0566-27-9652  
E-mail：jwc2020aichikariya@city.kariya.lg.jp HP：https://jwc2020aichikariya.jp/

## 大会プログラム

13日(金)	14日(土)	15日(日)
10:00 オープニング	10:00 分科会 セクション3	10:00 エキシビジョン
10:30 基調講演	13:00 記念講演	
13:00 分科会 セクション1	14:15 記念シンポジウム	
15:00 分科会 セクション2	16:00 エンディング	

## ～オンライン会議開催にあたって～

「日本女性会議2020あいち刈谷」の申込みパンフレットをお届けいたします。

「日本女性会議」は、男女共同参画に関する国内最大級の会議で、男女平等社会の実現に向けた課題の解決策を探るとともに、参加者相互の交流とネットワークづくりを目的としています。第37回大会である「日本女性会議2020あいち刈谷」は、性別だけでなく、年齢、国籍、働き方、障がいの有無など、様々な立ち位置にいる方々が、それぞれ「かけがえのない」存在として尊重される社会を目指す、「みんなの会議」として企画し、準備をすすめてまいりました。しかしながら3月以来の新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で様々な事柄に自粛を余儀なくされる中、全国から多くの方々に集まっていただく会議開催も見直しを迫られることとなりました。

開催の是非についても議論を重ね、6月の実行委員会総会において、コロナ禍の「今」だからこそ、そこで見えてきた「働き方」「家族」「ケア」「暴力」などジェンダー（社会的・文化的性別）にかかわる問題を含めて考えや思いを共有すること、1984年から続いている歩みを受け継ぐこと、昨年、台風19号のため開催中止となった佐野大会の思いを受けとめることも大切と考え、オンラインでの開催を決断いたしました。「ものづくりのまち」刈谷に培われた創意工夫の精神で挑戦を、との思いもあります。

「日本女性会議2020あいち刈谷」は、どなたでも参加できます。コロナ禍の今、アフターコロナの生活も含め、「かけがえのない」一人ひとりが大切にされる社会のあり方を、世代を超えて一緒に考える場にしていきます。

実行委員会一同、皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

日本女性会議2020あいち刈谷実行委員会  
委員長 山根 真理

### 大会シンボルマーク



刈谷市の花である「カキツバタ」をシンボルのモチーフに採用し、広がりのある会であることを花で表現しています。花の中央に人が集結したイメージを配っています。

### 日本女性会議2020あいち刈谷は ミライク (MeLike) 会議!!

- ★みんなのライクを集めて、  
未来のライフをクリエイト!
- ★“自分らしさ”が大切にされ、  
それぞれが自分の「好き」を実践できる  
選択肢の多い未来を目指す。

ミライク会議は、そんな社会を目指す  
「みんなの会議」です。

※ミライク会議は、学生ボランティアの皆さんが中心となって考えた、あいち刈谷大会の愛称です。

# 11月13日(金)

**オープニング** 10:00~

- 大会長・実行委員長あいさつ
- 前回開催地(栃木県佐野市)からのバトンパスセレモニー

**基調講演** 10:30~

## コロナ禍とジェンダー

新型コロナウイルス感染症をめぐる状況は、今日のジェンダー課題を顕在化し、わたしたちの生活に大きな影響を及ぼしています。一方で、新しい繋がり方、暮らし方、働き方の可能性も見えてきました。基調講演は、日本のジェンダーに関わる思想と運動をリードし続けてこられた社会学者、上野千鶴子さんを講師にお招きし、コロナ禍の中の社会をジェンダー視点で読み解いていただくとともに、コロナ後の社会におけるジェンダー平等の課題について、世代を超えて共有します。



菅野勝男撮影

**講師** **上野 千鶴子** 社会学者・東京大学名誉教授  
認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク (WAN) 理事長

**プロフィール** 富山県生まれ。1993年東京大学文学部助教授(社会学)、1995年から2011年3月まで、東京大学大学院人文社会系研究科教授。2012年度から2016年度まで、立命館大学特別招聘教授。2011年4月から認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク(WAN)理事長。専門は女性学、ジェンダー研究。この分野のバイオニアであり、高齢者の介護とケアも研究テーマとしている。1994年『近代家族の成立と終焉』(岩波書店)でサントリー学芸賞受賞、ほか著書多数。2011年度、「朝日賞」受賞。受賞理由「女性学・フェミニズムとケア問題の研究と実践」。2019年、フィンランド共和国からHän Honours受賞(長年の男女平等への貢献に対する感謝状)。2020年、「アメリカ芸術科学アカデミー会員」に選出される。

**分科会 セクション1** 13:00~

**分科会 セクション2** 15:00~

# 11月14日(土)

**分科会 セクション3** 10:00~

**記念講演** 13:00~

## 女性が社会を動かすときー日本骨髄バンクのケースから

講師の大谷貴子さんは、骨髄バンクの必要性を訴え、ゼロから東海骨髄バンクを起ち上げ、日本初の骨髄バンク設立の流れを作り、社会を動かしました。愛知は、骨髄バンクによる初の骨髄移植が行われた地です。社会運動の担い手として今も第一線で活躍する大谷さんから、日本骨髄バンクの設立や運営にあたっての苦労や工夫、運動を通じて得た喜び等について語っていただきます。



**講師** **大谷 貴子** NPO法人 全国骨髄バンク推進連絡協議会 顧問

**プロフィール** 大阪生まれ。埼玉県在住。1986年、大学院在学中に慢性骨髄性白血病を発症、88年に名古屋大学医学部付属病院で母親からの骨髄移植を受け完治。自分自身の闘病をきっかけに、骨髄バンクの必要性を痛感。89年に日本初の骨髄バンク、「東海骨髄バンク」を設立。厚生労働省等関係機関に働きかけ、(財)骨髄移植推進財団(日本骨髄バンク)設立の立役者の一人となった。現在、特定非営利活動法人・全国骨髄バンク推進連絡協議会顧問。中日社会功労賞・朝日社会福祉賞受賞。著書に「白血病からの生還ー「霧の中の生命」増補版」リヨン社、2005年、など。

記念シンポジウム 14:15~

スポーツから変える世界と未来

「スポーツには世界と未来を変える力がある。」このビジョンをもとに、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会は、多様性と調和の重要性を認識し、共生社会を育む契機となることを目指してきました。未知のウイルスの感染拡大は、性や人種の別なく、人々の健康や生活に影響を与えました。今こそ多様な人々の調和と連携が求められています。講演では、様々な差別の解消やLGBT支援に関する五輪開催国での取組みについて、40年にわたる五輪取材をもとに振り返り、スポーツを通して互いを尊重する社会について考えます。



司会者・シンポジスト

宮嶋 泰子 スポーツ文化ジャーナリスト

**プロフィール** 早稲田大学卒業。テレビ朝日にアナウンサーとして入社。日本初の女性スポーツキャスターとなる。その後ディレクター、プロデューサーを兼任し、ニュースステーション、報道ステーションなどで数多くの作品を作成。1980年からの19回の五輪取材と1982年からのパラリンピック取材経験を持つ。国際LHRCR協会理事を務める。日本オリンピック委員会「平成28年女性スポーツ賞」受賞。2020年に一般社団法人カレッジベータを設立し、若狭発起人やアスリートサポートの活動を開始している。



シンポジスト

兼松 由香

2016年リオデジャネイロ  
五輪サッカー日本代表

**プロフィール** 中央大学大学院体育学研究科修士課程修了。現在第七高等学校在学中。愛知教育大学を卒業後は名古屋で小学校の講師をしながら、愛知県統一の女子サッカーチーム「名古屋レディース」で練習に励み、カズーの15人制7人制日本代表として数多くの日本・世界大会に出場。ママさんサッカーとして活躍した。現在女子サッカーの歴史に関する研究を続けながら、世代の選手育成や社会貢献活動をしている。



シンポジスト

堀田 崇

NPO法人LOVELEGG  
理事長 弁護士

**プロフィール** 明治大学卒業。愛知学院で弁護士として活動し、愛知学院で社会男女共同参画推進本部委員長、名古屋市男女共同参画推進会委員等を務める。現在女子サッカークラブ「NGUウラブリッジ名古屋」を運営する法人の理事長として、女子サッカーを盛り上げるための交流、人材に優れた文武両道の選手育成をしながら、統合的男女性アスリートの地位向上、女性スポーツのより高いレベルづくりを活動している。



シンポジスト

村木 真紀

認定NPO法人  
虹色ダイバーシティ代表

**プロフィール** 京都大学卒業。日本大手製造業、外資系コンサルティング会社等を経て帰国。LGBT当事者としての実感とコンサルタントとしての経験を活かして、LGBTに関する調査研究、性的マイノリティに対する適切な情報発信、支援者をつなぐための支援など社会貢献活動を行っている。オリンピック事業に「性的指向による差別禁止」が明記されていることから、東京五輪開催地には「プライドウィス東京」が開催される。この準備・運営のメンバーでもある。



コーディネーター

來田 享子

中央大学スポーツ科学研究科  
社会体育学専攻科研究員

**プロフィール** 専門分野はオリンピック史、スポーツとジェンダー。共編著書「よくわかるスポーツとジェンダー」(ニセル出版、2018年)で日本スポーツとジェンダー学会・学会賞を受賞。日本スポーツ協会の研究プロジェクト研究員として指導や打ち合わせのための「体育・スポーツにおける多様な性のあり方ガイドライン」をハンドブックとして作成。オリンピック開催国で開催されるスポーツ学術会議The 2020 Yokohama Sport Can Researchの副会長兼総務委員。

エンディング 16:00~

- 次期開催地(山梨県甲府市)へのパトバスセレモニー
- 大会宣言

11月15日(日)

エキシビジョン 10:00~13:00

大会への参加の有無にかかわらず、  
どなたでも無料で参加できます!



U-40と考える かけがえのない“わたし”を生きる

男らしく、女らしくではなく“自分らしく”という教育を受ける一方で、「学校で感じなかったジェンダーギャップを社会で感じている」という声もあり、多世代と関わる中でもややを抱えている若者がいます。

U-40(30歳代以下)世代が抱える問題意識から、社会全体で多様性推進に関する価値観をアップデートするためにはどんな行動が必要か、オンラインならではの双方向議論で考えていきます。若者のみならず、彼らの考えを知るきっかけとして親世代、祖父母世代からのご参加もお待ちしています!

セクション  
11/13(金) 1 13:00~

**分科会 A** **高齢社会**  
**人生100年時代**  
～高齢者のつながりづくり～

人生100年時代。寿命が延びたものの、交差する層が狭い、対人関係がうまくいかないなどの理由で、生きづらさを感じている高齢者が数多くいます。地域社会には、意思決定する層に女性が少ないことなどにより、女性をはじめとする多様な人々のニーズに合った仕組みが整っておらず、選択の余地も少ない現状があります。

本分科会では、「コミュニティデザイン」実践者に事例を紹介してもらい、それを手がかりに、高齢社会を楽しく生き生きと暮らせるように、男女共同参画の視点に立った新たなつながりや、地域共生について考えます。

**出講者** **講師：野崎**

名前	所属	職名
山崎 真	京都大学	コミュニティデザイナー
野崎 淑子	徳川女子大学	教授

**分科会 B** **多文化共生**  
**多様性を活かした地域づくり**  
～“多文化”を地域の魅力に～

外国人住民が増え続けている日本社会では、外国人住民とのコミュニケーションや異なる生活マナーへのお互いの理解等、共生に向けた課題が顕在化しています。

本分科会では、課題先進地、あいち・対谷エリアにおける先進的かつ具体的な取り組みを、ジェンダー視点から捉えなおします。外国人住民の中にも性別役割分業や、職業・通勤通学におけるジェンダー差等があり、ジェンダー視点は多文化共生を考えるうえでも必須です。外国人住民との対話を通じて、多様な人たちがつながり合う、魅力的な地域づくりには何が必要なのか考えましょう。

**出講者** **講師：パネルディスカッション**

名前	所属	職名
すめい	愛知学院大学	社会福祉学専攻准教授
特野 佳寿子	社会福祉学専攻	准教授
外国人住民の皆さん		

**分科会 C** **DV**  
**だまっとれん! コロナ禍でも**  
**DVを生み出さない社会へ**

DV防止法が制定されて20年。支援の実態は喜ばれてきました。が、残念ながら、支援が必要とする人に届いていないという現状があります。さらに、コロナ禍の外出自粛や休業から、生活不安、ストレスでDVが増加、深刻化しています。

本分科会では、相手との関係性から抜け出すことが難しい被害者が、関係を断ち切り新しい生活を築いていくことができる「これからの支援」について考えます。私達一人一人が「自分ごと」としてDV問題に向き合い、できることは何か、一緒に考えてみませんか?

**出講者** **講師：だまっとれん事務局**

名前	所属	職名
八千代	愛知学院大学	准教授
岩手 香名子	徳川女子大学	教授

セクション  
11/13(金) 2 15:00~

**分科会 D** **防災**  
**生き抜く防災withコロナ**  
～アウトドアから学ぶ新しい知恵～

幼いころからの自然体験、防災準備の実験を学ぶことなどは、いざという時にベストを尽くすために大切です。

本分科会では、社会的弱者とされる女性や子どもがいのちをつなぐためのアウトドア講座です。クワイミング製出板や古紙製の製出板も学びます。夏休みで活動している防災団体の方も参加し、地域の防災にジェンダー・多様性の視点は活かされているのかについても取り上げます。

**出講者** **講師：藤原**

名前	所属	職名
あんどろ 莉子	アウトドア防災ガイド	
高木 一貴	防災マテマチック	
アスト	徳川女子大学	防災学専攻准教授
アスト	西尾 貴子	防災学専攻准教授
アスト	三浦 敦也	防災学専攻准教授

**分科会 F** **ライフ・ワーク・バランス**  
**一人一人が輝く未来**  
～モノづくりの愛知から～

誰もが社会や組織で生き生きと働ける時代へ入りました。その働き方や生き方もさまざまあり方がでてきて、業種より個人を主体とした価値観も生まれてきています。しかし、ここ愛知は、製造業が華やか、社会・産業・組織においても標準化の意識が強く、個性や多様性を活かしたあり方があまり進んでいない状況です。

本分科会では「100人100通りの働き方」をテーマにユニークな取り組みをしているサイゴウズ製板や、愛知での職人職人紹介しながら「どれもが幸せに活躍する組織、社会とは」をテーマに、受講者も夢見た働きながら、未来志向で考察したいと思えます。

**出講者** **三三三講師：事務局、パネルディスカッション**

名前	所属	職名
中野 智博	サイゴウズ株式会社	代表取締役
中野 智博	サイゴウズ株式会社	代表取締役
中野 智博	サイゴウズ株式会社	代表取締役

**分科会 G** **性の多様性**  
**生と性の多様性をみとめあうために**  
～教育・企業・行政の立場から～

性別についての捉え方や認識のあり方は人によって違います。性を一人一人違うもの(アスペクト)と捉えながら、性的マイノリティ/マジョリティという線引きをするのも、簡単なことではありません。一人一人異なる、わたしたちの生や性のあり方を互いに認め合うための取組みを、教育、企業、行政のそれぞれ立場から紹介してもらい、それぞれの地域や現場で参考にしようと思えます。本分科会を企画しました。

生と性の多様性を認め合うための第一歩をともに踏み出しましょう。

**出講者** **三三三講師：パネルディスカッション**

名前	所属	職名
藤原 真	徳川女子大学	准教授
藤原 真	徳川女子大学	准教授
藤原 真	徳川女子大学	准教授

**分科会 E** **男性にとっての男女共同参画** **定員 80人**  
**みんなで語ろう リモート座談会**

男らしさ、女らしさとは、一体どのようなことをいうのでしょうか。また、そうした「らしさ」観に世代間のギャップはあるのでしょうか。

本分科会では、まず、対面での小中高大学生を対象にした男女共同参画に関するアンケート調査の結果を報告し、「仕事も私生活も、よくばらうーWork Life, So called ハイブリッド人生のススメ」と題し基調講演を行います。また、参加者全員でグループワークを行い、性別平等の「らしさ」について考えます。

**出講者** **講師：基調講演、グループワーク**

名前	所属	職名
川島 真	NPO法人フューリング・ラボ	代表理事
川島 真	NPO法人フューリング・ラボ	代表理事

**分科会 H** **女性が輝けば地域も輝く** **定員 80人**  
**わたしが元気に活躍する地域づくり**

コロナ禍拡大を受け、全国にある自治会や町内会の多くは、会議や活動の中止・延期を余儀なくされ、参加者の低下や役員負担の増加などですでに抱えていた課題に加え、持続可能な状況にあります。

本分科会では、女性役員の高齢化により「今必要とされること」を「今できる方法」に活動を展開した事例や組織再編を促した先進的な取り組みを学びます。参加者が自分の所属する地域の現状を把握し、ありたい未来を描き、組織を活性化していくために「今動くべきことは何か」に気づく機会とし、男女共同参画による全国の地域変革を促します。

**出講者** **講師：グループワーク**

名前	所属	職名
川北 真	財団「人と地域」の未来研究	代表
川北 真	財団「人と地域」の未来研究	代表

**分科会 I** **子ども・子育て** **定員 80人**  
**子どもたちの未来をプロデュースする**  
～今やるべきこと、今できることをみんなで考えよう～

子どもの未来を思いやせしめよう。

コロナ禍で子どもたちの生活は、大きく変わりました。子どもに関する新たな問題も顕在化してきています。親や家庭を取り巻く環境、学校、幼稚園や子ども園などのあり方も劇的に変化し、支援者も戸惑いを覚えます。今だからこそ考えることも多いのではないのでしょうか? 子どもが育つためにわたしたち大人が何をすべきか、今から何をすべきか、【生活や暮らし】【子どもの遊び】【コミュニティ】に分かれ、現在の問題点や悩んでいること、これから課題を持ち帰るべきことをグループで話し合います。最後は皆さんの意見をもち帰って分かち合います。

**出講者** **講師：ワールドカフェ形式グループワーク**

名前	所属	職名
永田 真	徳川女子大学	准教授
藤原 真	徳川女子大学	准教授
藤原 真	徳川女子大学	准教授

## はじめてのリモート研修活動 「日本女性会議 2020 あいち刈谷」

中島みち子

現在は、第3波と報じられているコロナウイルスですが、振り返れば2月のクルーズ船「ダイヤモンドプリンセス号」の報道時はこのような状況になるとは想像していませんでした。3月各地の学校の変則的な卒業式の報道にも危機感より、関係者の暖かい努力に拍手を送っていました。町の中での買い占め騒動にも慌てず、変わらない日常生活でした。感染拡大を強く意識しながらの暮らしが始まったのは、子どもたちがようやく入学して親子で学校生活に不安と期待に胸を膨らませている4/7、「非常事態宣言」と共に全国一斉の休校の措置がとられてからでした。様々なことが一気に確実に変化しました。コロナパンデミック、世界的な感染の状況は、オリンピック・パラリンピックを延期させ、行政が主催する行事は全て中止、公共施設は閉鎖（4/2）、準じて市民活動も停止となり、暮らしを支える大人の働き方も変化して、以前は当たり前であった会社や事務所などに出かけて行くのが普通の働き方はテレワークになり、大人も子どもも自宅で長時間を一緒に過ごすという生活様式になり、経験のない暮らしに戸惑いました。

毎日報道される感染者数が気になる閉塞的な社会空間になってしまいました。6/16から施設の利用が再開されましたが、マスク着用や人数制限、手指消毒・検温換気など新たな生活様式は定着しつつも、これまで通りの活動を続けることは困難な状況となりました。

このような「定例会を休まず続けること」に意義を見出すという初めての状況のなか、今年の「日本女性会議 2020 あいち刈谷」はオンラインでの開催が発表されました。コロナ禍の今だから見えてきたジェンダー課題、新たな暮らし方・働き方などが示され私たちはこのテーマを全員で共有すべきと連絡会全員参加の異例の研修会に取組みました。例年は活動経験が比較的浅い方を優先的に推薦・参加を実施し、全国的な女性の活動や課題を学習・共有する大切な研修活動でしたが、今年は連絡会全体として参加、暮らし方が変化した「コロナ禍の今」だからこそ、急増したジェンダー問題に、全員で取り組めたことは大変意義深い研修であったと感じています。

この新たな取り組み、特にITに弱い私たちをセンター職員の方々が支えて下さったことに深く感謝申し上げます。

今後はこの初めての経験を活かして、ジェンダー平等・多様な性・個性を認め合い「2020 あいち刈谷」のテーマ “かけがえのないわたしを生きる” を忘れず活動を続けたいと思います。

## 全体会 オープニング・基調講演・記念講演・記念シンポジウム

日本女性会議 2020 11月13日（金）

10時30分～11時30分

基調講演「コロナ禍とジェンダー」上野千鶴子

報告者：中村洋子・深山キクエ



上野千鶴子さんの講演は、ジェンダーの視点でコロナ禍を分析することから始まりました。非常時には平時の矛盾が拡大・増幅して現れるように、コロナ禍で今まで見えなかった問題がより顕著に見えてきました。第1は、学校の休校によって、子どもの世話を誰がするかということ。女性の家事負担が増え、家事や子育てを一手に背負っている現実や、仕事に大きな影響が出て、仕事を辞めなければならない等です。第2に、非正規雇用の女性が7割を占めるため、賃金格差と失業による女性の貧困が問題になっています。特に、シングルマザーの家庭貧困はさらに深まり、DV問題も急増しました。これらは、日本社会において長期にわたり存在している問題であり、弱者への救済ができていないことの現れです。東日本大震災の際、被害者全員に経済的救済の手を差し伸べるためには、世帯単位制から個人単位制にするべきだと叫ばれていたにもかかわらず、それが実現しなかったために、今回も一番救済が必要とされる女性への給付金が届かなかった事例もあります。

一方で、コロナ禍により、家庭で過ごす時間が増えたために、夫婦間で家庭内の役割分担を見直すきっかけになり、良い変化も生まれました。昔は職住一致の社会であったのが、職住分離社会に変化していたところ、テレワークを余儀なくされたために通勤がなくなり職住混在の社会に戻ったとも言えます。

また、コロナ禍で世界の女性リーダーの活躍が目立ち、単に男性社会の継承ではなく、女性の特性を活かしたリーダーシップを発揮することが効果的であることもわかりました。日本社会でも女性が政治にかかわっていくことの重要性が示され、強制力のあるクオータ制導入が必要であることも証明されました。今後超高齢社会になっていくが、能力やスキルが自分になくても他人に助けを求める力があればいいし、「困った、助けて」と言える社会になればいい。あらゆる分野で女性を増やして、安心して弱者になれる、加齢や介護を恐れなくてすむ社会に変えていきたいと訴えられました。

講演後半、大学生からの質問に答える中で、仕事と家庭両面で自己実現できるようにするには夫に交渉して変える力を持つことが大事と語られました。これからの女性は、自らの意見を相手に伝える能力を備えることが必要で、主体性と説得力のある自己主張が要求されることを実感しました。男性と対等であることを女性自身が自覚することが重要なのではないのでしょうか。

上野さんの講演内容は、総合的かつ俯瞰的であり、過去の経験をふまえて現在を分析し未来につなげる意義深いものでした。私たちは、コロナ禍で経験したことを今後の課題と

してとらえ、みんなが支え合い思いやることでより良い社会を築いていくことができると確信しました。

## **分科会C 【DV】だまっとれん！コロナ禍でもDVを生み出さない社会へ**

2020年11月13日（金）13:00-14:30

報告者：石塚・東海林・中島

分科会Cは、コロナ禍で顕在化した、典型的な家庭内DVをドラマ化したアニメの放映で始まりました。

次に、『DV被害からの離脱・回復を支援する～被害者の「語り」にみる経験プロセス～』を昨年上梓した増井香名子さん（新見公立大学講師）が講演しました。増井さんは、DV被害者をインタビューし、DVを受け始めてから離脱するまでの心身の変化と、辛い心的外傷を受けた後、被害者がどのように力を取り戻すか、そんな被害者をどのように支援すべきかを議論しました。

続いて、愛知県立大学名誉教授の須藤八千代さんが進行する座談会に移りました。パネリストの1人である弁護士は、「お試し相談」に来られる被害者支援の難しさを、人権擁護委員は、子どもから受ける相談への苦慮を語りました。それを受けた増井さんは、被害者支援における加害者へのアプローチと、2次被害への懸念を問題提起されました。最後に、「人と人との境界線」が損なわれた状態で子どもが被害を受けることから、「人々の安全安心が守られる社会」の構築が急務であるとの発言をもって、分科会Cは閉会しました。（石塚）

増井さんが語られた被害者の自己認識、主体的な自己決定、当事者主義の支援と自尊感情の回復は、基調講演で上野千鶴子さんが強調した廻りを巻き込む力と自己の尊厳回復と尊重に重なると思います。

私たちの役割は、共感的寄りそう隣人になる事でしょうか。座談会でも語られましたが、今必要なのは、自助、共助、公助、中でも圧倒的に社会的支援の充実であり、法と社会制度の整備が求められています。（東海林）

紹介された事象が繰り返されないためには、お互いに助け合うことが出来る柔らかなコミュニケーション、相談できる場を創り合っておくことの重要性を強く思いました。「あそこへ行って相談してみようと思える」ような、日常的な信頼関係が築ける場として「目黒男女平等・共同参画センター」の存在、機能の充実を思いました。（中島）



## 分科会D 【防災】生き抜く防災withコロナ～アウトドアから学ぶ新しい知恵

2020年11月13日（金）15:00-16:30

報告者 廣橋泰子 山田初子 米田貴子

講師：あんどろりす（アウトドア防災ガイド）

テーマ：生き抜く防災withコロナ～アウトドアから学ぶ新しい知恵～

内容：講師は、阪神大震災の経験とアウトドア体験を通して、社会的弱者とされる女性や子どもが、災害時に命をつなぐための防災テクをあますところなく披露してくれた。

- ①アウトドアでは、暑さ寒さをしのぐ知恵が必要。それには真逆の事をすればよい。薄い服を重ね着すると空気の層ができて、断熱効果がある。ダウンは雨にぬれると羽がしぼんで寒くなる。下着は濡らしてはいけない。濡れにくく、蒸れないものを着る。
- ②車は冬、テントよりも寒くなる。窓にプチプチのビニールを貼ると断熱材の役割をする。
- ③リュックサックの詰め方は、重い物を上につめる。重心は上の方が軽く感じる。赤ちゃんを抱くときも同じで、古武術の技を使うとよい。
- ④頭を守るため、戦時中は鉄兜や頭巾をかぶったが、今はLEDヘッドライトを装着した防災ヘルメットを使用する。
- ⑤水害時の避難は、浸水しないうちに早目の避難が大事。人は足首位の水でも流される。水圧の怖さを知ること。
- ⑥日本の避難所は雑魚寝状態で、性暴力も起きている。女性ばかりでなく、男性や子ども、60代の人でも被害に遭っている。「人道憲章と人道支援に関する最低基準」であるスフィア基準以下と言われている。コロナ対応で5月に内閣府が指針を出した。密状態は改善されつつあるが、男女共同参画の視点、性犯罪対策は、まだ不足している。
- ⑦赤ちゃん用ミルクは粉より液体が良い。液体ミルクはカイロでも温められる。母乳の人には、安心して授乳できる環境が必要。
- ⑧フィンランドは女性閣僚が半数以上いる。リプロの権利が保障されている。ミルクと母乳を対立関係や義務にしてはならない。
- ⑨誰ひとりとり残さない防災が大事。クラウドファンディングを活用してお金を集め、スロープを作って車椅子避難ができるようにすると良い。
- ⑩アウトドア避難は自己責任。隣の人を基準にせず、自分で判断しなければならない。警戒レベル3で避難する。

感想：地域でできるワンアクションについて、ゲストの方々の意見交換も参考になった。公的支援ばかり当てにせず、アウトドアのスキルを身につけて、周りの人と協力し、災害を乗り越えられると良いと思った。

文責 廣橋泰子

## 分科会 G 【性の多様性】生と性の多様性をみとめあうために

### ～教育・企業・行政の立場から～

2020年11月14日（土）10:00-11:30

報告者：郡、齊藤

講師：コーディネーター 風間 孝（中京大学 教養教育研究院教授）

パネリスト：浦田 幸奈（愛知県中学校教員）

加藤 聡人（加藤精工株式会社 代表取締役社長）

樋口 進（豊明市役所 市民協働課）

風間さん：LGBTの人は学校でのいじめ経験が多く、抑うつなどストレスを感じている。求職時の困難、職場での差別的言動などは勤続意欲に影響がある。行政では職員の理解、公営住宅の申し込み、防災時の配慮などへの対策が求められている。

浦田さん：教員になり、素直に生きようと思い、途中でトランスジェンダーであることをカミングアウトした。生徒は、何も変わらないよ、との反応。左利きへの配慮や、誰にも役立つスロープ等と同様に、ともに生きる当たり前の存在として理解してほしい。

加藤さん：3年前にLGBTが7.6%いると知り、取組みを始めた。当事者の社員の協力で、休暇制度に性別適合手術等を加え、育休は養子も対象に、お祝い金の給付対象に事実婚、同性婚も認めるなど改善した。多様性を認め合い、人を尊重する職場づくりをしている。

樋口さん：市は平成29年度に「LGBTともに生きる宣言」をし、啓発事業や、職員、関係機関等への研修を毎年行っている。また「パートナーシップ宣誓制度」で同性婚への理解を広げた。すべての市民の人権を尊重する行政をめざしたい。

#### 【感想】

- 性的少数者の苦しみ、自殺の多さ、いじめの対象になりやすい、家族の理解が得にくい、同性婚がまだ認知されていない、など多くの現状を学びました。
- 誰でも安心安全な暮らしを送れる権利は、誰からも侵すことが出来ない基本的人権だと、強く認識しました。
- LGBT理解と差別解消の取組みは始まったばかりですが、当事者のお話が身近で具体的なので参考になりました。
- 企業や行政のトップが多様性を認め、人権尊重の姿勢を持つことが大事だと感じました。

## 男女平等・共同参画センターより

2020年は、コロナ禍による大きな変化を受け入れてきました。計画していたことが予定通り進められず、感染者数を気にしながら行動をするというストレスがたまる日々の中ですが、今まで気づかなかった気付きを得ることも多かったように思います。

特に、基調講演で上野先生が、「非常時には平時の矛盾が拡大・増幅して現れる」、とおっしゃっていたのが印象的でした。長引くコロナ禍において、DV被害や女性の自殺数の増加といったニュースも報道されています。そのような中、男女平等・共同参画センターで何ができるのかが問われているのだと感じています。

こうした状況を踏まえ、今後とも女性団体の皆様ほか区民の皆様とともに、男女が平等に共同参画し性の多様性を尊重する社会の実現を目指し、歩を進めていきたいと願っております。

以 上